

『黒猫の溜息』

くま、人間とはこんなものく

くたに
九谷
むくち
六口

人 物

黒猫	……	年取ったメス猫
犬塚隼人	(56)	…… 会社員
犬塚桃子	(53)	…… 隼人の妻
犬塚倫子	(22)	…… 犬塚家長女・エステティシャン
犬塚栗子	(17)	…… 犬塚家次女・高校生
吉村良雄	(58)	…… 区役所職員

○犬塚家・俯瞰（朝）

二階建ての豪華な今風の家々の間に、
生垣に囲まれた古風な木造平屋の
家。

○同・縁側・中（朝）

ガラス戸を通して朝日が差す中、黒
猫が体を丸めて寝ている。

セーラー服姿の犬塚栗子(17)が鞆を持
ってドタドタと来て猫の傍に両膝
を立てて座る。

栗子「タマ、暖あったかでちゅね」
と頭や背中を撫ぜ廻す。

× × ×

濃い目の化粧をしたスーツ姿の犬塚
倫子(22)が猫の傍に立ち、

倫子「クロッ！ あんた、まだ居るのッ！」
と顔をしかめて歩いていく。

犬塚隼人(56)が左脇に鞆を抱え、ネク
タイを締めながら猫の傍に座り、

犬塚「モモは、いつも、しじゆかで良い子
でちゆねえ」

と腹を撫ぜる。

黒猫N(落ち着いた女の声)「フフ、旦那様、

桃子奥さまが来ましたよ」

犬塚の後ろに犬塚桃子(53)が眉を顰^{ひそ}め
て立つ。

桃子「ねえ、このノラ猫、モモなんて呼ば
ないですよ。それって私への当て付け！」

犬塚「頬つぺたが桃みたいじゃないか」

桃子「黒い桃なんてないわよ。とにかく、

その名前は止めて。食べるんでしょう」
犬塚「当たり前だ」

と二人が縁側に続く食堂に行き、テ
ーブルに座る。猫が食堂を見る。

黒猫N「私、この縁側が気に入っちゃっ…
…かれこれ三ヶ月。もう他の家に行く気
はないわ。でも…この家族は、バラ
バラ」

桃子「私、猫、大嫌い！ 飼うのイヤ！」

犬塚「お陰で鼠が大人しくなったじゃないか」

桃子「そもそも鼠と同居しているなんて、今時ないわよ。ねえ、建て替えましようよ」

犬塚「駄目。爺さんが昭和初期に建てた日本家屋だ。文化的にも価値がある」

桃子「阿保くさっ！ 貴方、遅刻するわよ」
そそくさと立ち上がる犬塚。

○同・食堂・中（夜）

桃子と栗子、テーブルに座り食事をしている。猫が傍に来て寝そべる。

栗子「板壁の家なんて……恥ずかしくって友達も呼べない」

桃子「そうよね。そろそろ建て替えよね」
栗子「ねえ、お父さんに言ってよ」

ガタツと音がして、赤い顔をした倫子が入って来る。

倫子「何してるの？」

栗子「見れば判るでしょう。夕飯よ」

倫子「あつ、そう。じゃー、私、寝るわ」

と部屋を出て行こうとする。

桃子「倫子、好い加減にしなさいよ」

倫子「何が……お酒？ 良いじゃない。私が稼いだお金をどう使おうが」

桃子「全く情けないわ。私は、酒飲みに育てた積りはないわよ」

倫子「あーら、辛気臭いこんな古びた家に暮せば、こうなっちゃうのよ。お父さんに言つといて。建て替えよ、こんな家」

栗子「建て替えには賛成ですが、お酒とは関係ないと思います」

倫子「煩いわね！ 蛾鬼がとやかく言うんじゃないの」

栗子「あーら、随分な事を言うわね。ブスにお綺麗ですわなんてオベツカ使っちゃってさ。適当に顔をいじり巻くって、お金、稼いでるくせに。何がエステイシャンよ！」

倫子「ションベン臭い高校生が、煩いわよ」

猫が、ニャ〜オと鳴く。

倫子「あくイヤだ。古びた家に黒猫。まるで化け猫屋敷だわ」

と食堂を出て行く。猫が栗子の膝に飛び乗る。栗子、猫を撫でる。

桃子「問題はお金ね。どうせ、あんたは私立大学だろうし……入学金や学費……」

栗子、首を竦め、猫を椅子に置いて部屋を出る。

桃子、物思いに耽っている。

ネクタイを緩め、顔を赤くした犬塚が入って来る。

犬塚「お茶漬け！ ウイツ！」

桃子、同じ姿勢。犬塚が座って、

犬塚「オイツ！ 亭主がお茶漬けと言ってるんだぞ！」

猫、犬塚の膝に飛び乗る。

犬塚「おくモモか。良い子でちゅね〜」

桃子「その名前、止めてよ。ねえ、建て替

え」

犬塚「(キツパリと) そんな金はない」

桃子「取締役は無理なんでしょう。ねえ、早期退職に応募したら。退職金、割り増しになるじゃない。部長って言ったって何日クビになるか判らないんだし。今のうちよ」

犬塚「ナニーツ！」

と猫を床に置き、立ち上がる。

犬塚「俺が、どれだけ頑張っているのか、

お前には判らないのか！」

と部屋を出る。猫が桃子の足を舐める。

桃子「キヤーツ！」

と飛び退く。

○同・食堂・中(朝)

縁側に寝そべる猫が見える。

桃子と普段着の犬塚、食事をしていく。

桃子「区役所の人があるって。何なの？」

犬塚「(笑顔で) 実はな……」

栗子が顔を出す。犬塚を見て引返す。

パジャマ姿の倫子が来るが、犬塚を

見て、

倫子「あら、居たの」

と欠伸をしながら部屋を出る。

猫N「そろそろ始まりますよ」

犬塚「(怒って) 何だ、うちの娘は。挨拶もしないじゃないか。お前の躰が悪いんだよ」

桃子「あら、何でも私の所為にしないでよ。

ナニよ、建て替えも出来ないくせに。娘

たちも呆れてるのよ。甲斐性なし！」

犬塚「(立ち上がり、大声で) ナニッ！ 言

って良い事と悪い事がある。謝れ！」

倫子と栗子が廊下から二人を見てい

る。桃子、立ち上がって、

桃子「だって、そうじゃない。ご近所はチヤンとした家なのに、うちは何よ！ こ

んな時代遅れの家！」

犬塚「そんなに、この家がイヤなのか！　じ

ゃー、お前たちみんな出て行け！」

倫子「そんなの横暴よ！」

栗子「私は、お姉ちゃんと違って未成年ですからね。出て行きません」

倫子「未成年なんて関係ないわよ」

栗子「未成年保護法があるの！」

猫N「こうなると、いつも滅茶苦茶です。

あら、誰か来たようですよ」

ピンポーン！　四人が同じ方向を向く。

○同・居間・中（朝）

丸縁眼鏡を掛けた吉村良雄⁽⁵⁸⁾が、犬塚と桃子の前に座り、栗子とパジャマ姿の倫子が入り口に立って三人を見ている。

縁側からこちらを見ている猫。

吉村、低姿勢になり、ずり落ちる眼

鏡を上げながら、

吉村「先程、大きな声が……もし、お取り
込み中でしたら、日を改めて……」

犬塚「構いません。いつもの事ですから」

吉村「いつもの事なんですか……で、では。

（キリッとして）文化財保護条例に則り、
区教育委員会にて犬塚邸を登録すべし
との結論に至りました」

エツと驚く桃子、倫子、栗子。

犬塚が、どうだ！ との顔をする。

桃子「こ、このボロ家が、ですか？」

吉村「ボロなどと、文化財に対し失礼です。

この邸宅は切妻と入母屋の屋根。壁は下
見板張り、一部が漆喰。非常に珍しく、
永く区の文化財として保護、管理を考
えております。是非、ご協力をお願い致
します」

桃子「あの一、断っても良いんですか？」

吉村「今まで断った方はおりません。皆さ
ん、教養が高く、文化に対する理解も深

く、併せて知識人でいらっしやいました」

桃子「じゃー、断ったら……」

吉村「はい、全く逆方向のご家族と……」

倫子「それって、脅迫じゃないの？」

吉村「いえ、一般常識論でございます。で、どう致します」

犬塚「(威厳を持って) 勿論、OKです。但し、庭内、屋内は非公開との条件で」

吉村「勿論です。登録後、区報で公示されますので鑑賞に訪れる方々がいらっしやると思います。出来ましたら生垣はそのままで」

栗子「私、ジロジロ見られるなんてヤダわ」

吉村「はい。このような価値ある日本邸宅に住まわれる犬塚家は、由緒あるご家系の方々と、尊敬の眼差しが集るかと思ます」

女三人、顔を見合わせ、

女三人「尊敬の眼差し……」

犬塚「で、管理とか修繕はどうなります」

吉村「はい、区から補助金が出ます」
女三人「補助金！」

イソイソと吉村の傍に来る。

○同・縁側・中（朝）

猫が、ノンビリと横になっている。
パジャマ姿の犬塚が猫の傍に座る。

犬塚「モモちゃんはねえ、文化財に住んでるんでちゅよ。凄いでちゅねー」

薄化粧の桃子が後ろに来る。

桃子「その呼び方、止めてよ。貴方、休みの日はキチンとしてくださいね。文化財を見に来る人がいますから」

猫N「フフ、奥様は、身奇麗にして笑顔を絶やしません」

犬塚と桃子、食堂に行き食べ出す。

ドタドタッとGパン姿の栗子が来る。

栗子「タマちゃん、元気でちゅか」
と食堂を覗き、

栗子「お父さん、お母さん、図書館に行っ

てきまゝす」

と笑顔で出て行く。

猫N「フフ、栗子さん、日本の文化財に興味を持ちちゃったみたいですよ」

着飾った倫子が来る。

倫子「クロちゃん、元気。あたし、デートよ」

と食堂を覗き、

倫子「夕方、彼を連れて来るからね」

犬塚「オイ！ 彼って、どの彼だ」

倫子、ニヤツと笑い、出ていく。

犬塚「誰に似たんだ、まったく」

猫が、ニヤ々オと鳴く。

桃子「貴方、ご近所がね、このノラのこと
血統書付きの猫ですかって……。ただの
黒猫ですよって答えたら、まーご謙遜を
だって。オホホ」

犬塚「じゃー、飼っても良いんだな」

桃子「勿論よ。今更、ノラなんて言えない
わ」

犬塚、呆れ顔で桃子を見る。

猫が体の向きを変え、庭の方を向く。

猫N 「フフ、これで、私も死ぬまで日向ぼつこが出来そうです。でも……まだ、私の名前は、バラバラ……。あゝア、早く決めて欲しいのに」

と大きな伸びをする。